

次の文章を読んで問題1〜4に答えなさい

「ふうふうと叩きつけてきた。

それは『雨』というより、襲いかかる水の粒たちだ。

①あれくるった夜の嵐は、その粒たちを、ちっぽけなヤギの体に、右から左から、力まかせにぶつけてくる。

白いヤギは、やっとの思いで丘をすべりおり、こわれかけた小さな小屋にもぐり込んだ。

②くらのやみの中でヤギは体を休め、じっと、嵐のやむのを待つ。

ガタン！

誰かが小屋の中に入ってくる。

ハアハアという息づかい。

何者だろう？

ヤギはじっと身をひそめ、耳をそばだてた。

コツン、ズズ。

コツン、ズズー。

一歩一歩、固いものが床を叩いてやってくる。

ひづめの音だ。

なあんだ、それならヤギに違いない。

ヤギはほっとして、そいつに声をかけた。

「すごい嵐ですね。」

「え？ おや、こいつは失礼、はあはあ、しやした。

真っ暗で、ちっとも、ハアハア、気がつきやせんぞ」

相手はちよつと驚いて、荒い息で答える。

「わたしも、今飛び込んで来たところですよ。

しかし、こんなにひどくなるとはね。」

「まったく。……おかげで足はくじくし、

おいらはもう散々ですよ。ふう〜」

相手はやつと大きいため息をつき、

杖にしていた棒切れを床に置く。

ということは……。

そう、その杖をついてやって来た黒い影は、

ヤギではなく、オオカミだったのだ。  
特に、このオオカミ、すごい牙を持ち、  
ヤギの肉が好物ときている。

「あなたが来てくれて、ほっとしましたよ」  
ヤギの方は、相手がオオカミだとは、  
まだ気がつかない。

「そりゃあ、おいらだって、嵐の夜に、  
こんな小屋にひとりぼっちじゃ、  
心細くなっちゃいますよ」

どうやらオオカミのほうも、  
相手がヤギだとは気づいていない。

「よっこらしよ。うっ……、いてててて」  
「どうしました」

「いやあ、ここに来るとき、ちよつと、脚をね」

「そりゃあ、大変だ。ほら、こつちに脚を伸ばしてくださいよ」

「お、それじゃ、ちよつくら失礼して、よいしょつと」

オオカミが伸ばした脚が、チョンとヤギの腰に当たる。

ヤギは、

『あら？ ひづめにしては、ずいぶんやわらかいな』  
と思つたが、きつと今当たつたのは膝なんだと思ひ込む。

「ハ、ハ、ハ、ハックチュン！」

突然、オオカミが大きなくしゃみをした。

「だいじょうぶですか？」

「うっ……、どうやら鼻風邪をひいちまつたらしい」

「わたしですよ。おかげで、全然においがわからないんです。」

「エへへ、今わかるのは、お互い声だけってわけっすよね」

「ハハハ、本当ですね」

オオカミの笑い声を聞いて、ヤギは思わず、

『オオカミみたいになすごみのある低いお声で』

と言いかけたが、失礼だと思い、口を閉じる。

オオカミのほうも、

『まるでヤギみたいに甲高いかんだかい笑い方でやんすね』

つて言おうとしたが、そんなことを言つたら

相手が気を悪くすると思ひ、やめることにする。

風のうなり声と、

小屋に叩きつける雨の粒が、  
かわりばんこに響きわたる。

「どちらにお住まいで」

「へえ、おいらは、パクパク谷のほうでやす」

「ええ！？パクパク谷ですって？」

あつちのほうは危なくないですか？」

「へえ、それでやんすか？」

住み心地はいいでやんすよ」

ま、ちよつと険しいけれど、

パクパク谷とは、

オオカミたちのいる谷である。

「ふーん、度胸どきょうがあるんですね

わたしはサワサワ山のほうですよ」

「おーっ、そいつはうらやましい。

そつちのほうは、うまい食い物が、たくさんあるじゃないすか」

うまい食い物とは、ヤギのことである。

「まあ、ふつうですよ、ハハハ」

その時、二匹のお腹へらが同時に鳴る。

ぐうぐ。

「そういえば、腹が減りやしたね」

「ほんとに。わたしもぺこぺこですよ」

「ああ、こんなとき、うまい餌えさが近くにあつたらなあ」

「わかります、わかります。わたしも今、

おんなじことを思ってたんです」

「そういえば、おいら、よくサワサワ山のふもとにある

フカフカ谷ふかふかのあたりに、餌えさを食べたに行きやすよ」

「おや、偶然ぐうぜん。わたしもですよ」

「あそこの餌は、特別うまいんすよねえ」

「ええ、においしいし」

「やわらかいのに歯ごたえもいっすから」

「毎日食べても飽きないくらいですよね」

「ほんと、一度食ったら病みつきになっちまいやす」

「うーん、その言い方、ぴったりですよね」

「ああ、思い出しただけでたまらねえ。

よだれが出そう」

「ああ、思いつきり食べたい」

そこで二匹は同時に、

『草』とヤギが言い、

『肉』とオオカミが言った。

けれども、ガラガラと遠くで鳴った雷に、  
ちよūdōその声はかき消された。

「そういえば、おいら、子どもの頃はやせっぽちでね。今じゃあ特別大食らいだけど、  
あの頃はよくおふくろから言われたもんすよ。『もつと食え、もつと食え』ってね」

「あら、わたしですよ。『そんなんじや、いざという時に、早く走れないでしょ。』

早く走れないと、生き残れないわ』って、食事のたびに母親にね」

「そうそう、おいらのうちも、同じ言い方すよ。」

『早く走れないと生き残れないわよ』って」

「ハハハ、わたしたち、ほんとによく似てますねえ」

「へへへ、ほんと、真つ暗でお互いの顔も見えないっすけど、実は顔まで似てたりして」

ピカッ！

その時、すぐ近くで稲妻いなずまが光り、

小屋の中が昼間のように映し出された。

「あつ、わたし今、うっかり下を向いてましたけど、

今、わたしの顔、見えたでしょ。似てましたあ？」

「……それが、まぶしくて、おいら思わず目えつぶっちまって」

「ま、もうすぐ夜が明ければわかることですよ」

ガラガラガラ〜！

突然、大きな雷の音が、小屋中を震ふるわせる。

「ひゃああ！」

思わず二匹は、しっかりと体を寄せ合ってしまう。

「あつ、失礼。どうもわたし、この音に弱くて」

「ふうー、おいらもなんですよ。ハァー、びっくりしやしたね」

「なんか、わたしたちって、似てると思いませんか？」

「いよつ、実はおいらも今、気が合うなあ〜って」

「そうだ。どうです、今度天気の良い日にお食事でも」

「いいっすねえ。ひどい嵐で最悪の夜だと思ってたんすけど、

いい友達に会って、こいつは最高の夜かしんねえす」

「おや、もうすっかり嵐も止みましたねえ」

「お、ほんとだ」

雲の切れ間にほんのわずかだが、星すら出てきた。

「それじゃ、とりあえず 明日のお昼なんてどうです？」

「いいっすよ。嵐の後は特にいい天気って言いやすからね」

会う場所は、どうします？」

「うーん。じゃ、この小屋の前では？」

「決まり。でも、お互いの顔がわからなかったりして」

「じゃ、念のため、おいらが

『嵐の夜に友達になったものです』って言いやすよ」

「ハハハ、『あらしのよるに』だけでわかりますよ」

「じゃあ、おいらたちの合い言葉は、

『あらしのよるに』ってことっすね」

「じゃあ、気をつけて、あらしのよるに」

「さいなら、あらしのよるに」

さつきまで荒れ狂っていた嵐が嘘のように

さわやかな風がふわりと吹いた。

夜明け前の静かな闇の中を

手を振りながら左右に別れていく二つの影。

明くる日、

この丘の下で、

何が起こるのか。

木の葉のしずくをきらめかせ、

ちよっぴりと顔を出してきた朝日に

そんなこと、

わかるはずもない。

問題1

下線のひらがなを漢字にしなさい。

①あれくるった

↓

②くらやみ

↓

問題2

ヤギとオオカミの住んでいる場所を

それぞれ答えなさい。

ヤギ

↓

オオカミ

↓

問題3

ヤギとオオカミの合言葉は何でしょう。

抜き出して書きさなさい。

問題4

ヤギとオオカミが同じ小屋の中にいたのに、なぜヤ

ギはオオカミに食べられなかったのか、考えて書きなさい。